

殺菌剤

ドーシャスフロアブル



殺菌剤分類

21,M5

農林水産省登録	第21199号
有効成分	シアゾファミド・・・・・・・・・・3.2% TPN（化管法1種）・・・・・・・・40.0%
性状	類白色水和性粘稠懸濁液体
人畜毒性	普通物（毒劇物に該当しないものを指している通称）
有効年限	3年
包装	250mL × 40本 500mL × 20本

特長

✓ べと・疫病にすぐれた効果を示し、広範囲の病害に高い予防効果
難防除のべと病・疫病にすぐれた効果のシアゾファミド（ランマン）と、幅広い病害に安定した予防効果を発揮するTPNの混合剤です。
ドーシャスに含まれるTPN有効成分量は、卵菌綱以外の各種病害にも十分な効果が得られるように配合されています。べと病や疫病に加え他病害が混発・同時発生する場面での基幹防除剤、ローテーション防除の主力剤として適しています。

✓ すぐれた残効性と耐雨性
有効成分のシアゾファミドとTPNは、共に残効性、耐雨性にすぐれ、圃場での安定した効果が期待できます。

✓ ユニークな作用機作
シアゾファミドは卵菌綱に対して低濃度で強力な呼吸阻害作用を持つ反面、標的外の生物には全く影響がなく、作用点レベルの選択性（高い安全性）を有しています。
TPNは、主としてエネルギー代謝系の種々のSH基酵素を阻害する多作用点剤であり、幅広いスペクトラムと40年以上使用されてきた中でも耐性菌が出現していないというすぐれた特性を備えています。

✓ まん延防止効果（サニテーション効果）
予防効果主体の薬剤ですが、遊走子の形成阻害作用に優れ、次世代の菌密度を効率的に抑えるので、未感染葉や周辺株への病害進展を防ぎます。

適用作物と使用方法

作物名	適用病害名	希釈倍数	10アール当り 使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	シアゾファミ ドを含む農薬 の総使用回数	TPNを含む農 薬の総使用回 数	
ぶどう	べと病 晩腐病 黒とう病	2000倍	200～700 ℓ	収穫60日前ま で	3回以内	散布	3回以内	3回以内 (休眠期は1回 以内)	
もも ネクタリン	黒星病	1000倍		収穫前日まで	2回以内		2回以内	6回以内 2回以内	
きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病 炭疽病 黒星病		150～300 ℓ		収穫前日まで		4回以内	4回以内	14回以内 (土壌灌注は2 回以内、散 布、常温煙 霧、くん煙及 びエアゾル剤 の噴射は合計 12回以内)
メロン	べと病 つる枯病 うどんこ病			収穫3日前まで					5回以内
すいか	褐色腐敗病 炭疽病 つる枯病				収穫前日まで				
トマト	疫病 葉かび病 輪紋病			100～300 ℓ					収穫7日前まで
なす	褐色腐敗病 黒枯病		収穫14日前ま で		3回以内		4回以内	3回以内 (は種又は定 植前の土壌混 和は1回以内、 散布及び無人 航空機散布は 合計2回以内)	
ピーマン	疫病 斑点病							4回以内	4回以内
はくさい	べと病 白さび病 黒斑病 白斑病		3回以内	3回以内	3回以内		3回以内 (土壌灌注は2 回以内、散 布及び無人航 空機散布は合 計3回以内)		
たまねぎ	べと病 灰色かび病								3回以内
ねぎ	べと病 黒斑病		3回以内	3回以内	3回以内		3回以内		
レタス	べと病 すそ枯病	3回以内						3回以内	3回以内

※本内容は2024年4月24日付の登録内容に基づいています。

効果・薬害等の注意事項

- 使用直前に、容器をよく振ること。
- 使用量に合わせ薬液を調製し、使いきること。
- ぶどうに使用する場合、幼果期（小豆粒大）以降の散布は、果粉の溶脱、品種によっては果実に薬害を生じるおそれがあるので、落花直後までに使用すること。
- 無袋栽培のネクタリンに使用する場合、薬液による汚れが生じるおそれがあるので、開花期以降の散布はさけること。
- 蚕に対して影響があるので、周辺の桑葉にはかからないようにすること。
- 本剤の使用に当っては、使用量、使用時期、使用方法を誤らないように注意し、特に初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

安全使用上の注意事項



- 誤飲のないように注意すること。
- 本剤は眼に対して刺激性があるので眼に入らないよう注意すること。眼に入った場合には直ちに水洗し、眼科医の手当を受けること。
- 散布の際は農薬用マスク、手袋、不浸透性防除衣などを着用するとともに保護クリームを使用すること。作業後は直ちに身体を洗い流し、洗眼・うがいをするとともに衣服を交換すること。
- 作業時に着用していた衣服等は他のものとは分けて洗濯すること。
- かぶれやすい体質の人は作業に従事しないようにし、施用した作物との接触を避けること。
- 夏期高温時の使用は避けること。

魚毒性等

- ・水産動植物（魚類）に強い影響を及ぼす恐れがあるので、河川、湖沼及び海域等に飛散、流入しないよう注意して使用すること。養殖池周辺での使用は避けること。
- ・使用残りの薬液が生じないように調製を行い、使いきること。散布器具及び容器の洗浄水は、河川等に流さないこと。また、空容器等は水産動植物に影響を与えないよう適切に処理すること。

保管

- 直射日光をさけ、なるべく低温な場所に密栓して保管すること。